

山口大学野良猫Oプロジェクト～山大にゃんこ大作戦フェーズ2～

ー山大にゃんこ大作戦ー

代表者 前原光主穂（共獣B 5年）

構成員 大和美海（人文B 4年） 本多紗弥華（共獣B 2年） 西本美晴（共獣B 5年）
石田千穂（共獣B 5年） 宮崎優衣（人文B 2年）
吉永陽水（人文B 2年） 和泉川日菜（農B 2年）
清原鈴音（共獣B 2年） 川村文乃（共獣B 2年）
梅岡翔太（農B 2年） 上川あゆみ（理B 1年）
板垣潮（経済B 1年） 本永悠太朗（農B 1年）
古田瑞葵（共獣B 1年） 西村真央（農B 1年）
野尻祐衣（共獣B 1年） 前木香花（人文B 1年）
岩崎璃美（国総B 1年） 五十嵐希望（経済B 1年）
杉山音和（国総B 1年） 妹尾權（農B 1年）
高山久遠（農B 1年） 大熊誠人（経済B 1年）
加藤泉水（共獣B 1年） 山本茉央（農B 1年）
有働綺芽（人文B 1年） 高畠惇（教育B 1年）
森野羽菜（経済B 2年） 堤風登（医学B 1年）
徳永菜月（農B 1年） 天野真裕（国総B 1年）
福田鳳芽（農B 1年） 濱田凌佳（教育B 1年）
太田大斗（経済B 1年）
他 18名

1. プロジェクトの概要

山口大学吉田キャンパス内に生息する猫について、山大にゃんこ大作戦が主体となって、猫に関わりを持つ関係者をはじめみんなで考えていけるような環境をつくり、猫の適切な管理体制の確立を目指す。これにより、吉田キャンパス内で見られる猫に関するトラブルを解消するとともに、むやみに新たな野良猫を住み着かせることなく、野良猫ゼロに向けた取り組みを行っていく。

本キャンパスでは昔から野良猫が可愛がられてきた。しかし、エサやりが過剰になるにつれ、住み着く野良猫は増え続け、さらに繁殖のコントロールを行わないことにより、次々と子猫が生まれて数が急増していき、一時期には 60 頭以上にもなった。糞尿被害などを訴える声も増えてきたほか、望まれない死を迎える猫も後を絶たず、人にとっても猫にとっても悪循環となっていた。

おもしろプロジェクト'18を機に山大にゃんこ大作戦が発足し、猫へのエサやりの状況調査から始まり、TNR（不妊処置）や譲渡活動などに尽力してきた。現在キャンパス内には 29 頭（プロジェクト開始当時）の猫が 6 か所ほどのコロニーを形成して生息しており、全頭 TNR が完了している。頭数は減少傾向に転じたものの、まだまだ多くの猫がおり、排泄物の掃除が不十分なことで深刻な糞尿被害に困っている人がいる。また、過剰・不衛生なエサやりも不特定多数続いており、環境や猫にとっても不適切な行為であるだけでなく、新たな野良猫が次々に住み着く可能性が高い。よって、排泄物の処理やエサやりの管理などを含め、猫の管理についてより良い方法を見つけていく必要がある。

こういった野良猫の問題は地域の環境問題として、関係者をはじめ多くの人で取り組んでいくことが友好的かつ効果的な解決に必要である。しかし、猫についての管理どころがないため、各関係者が話し合う場がなく猫への対応に基準もない。結果、エサやりをしないよう掲示をする側とそれでもエサやりを続ける側とで、対立した行動をとっている状況が続いている。そこで、頭数のコントロールを行ってきた山大にゃんこ大作戦が、自分たちでも実際に給餌と掃除の管理に取り組みながら、エサやりをしている人と施設管理者など、猫についてコンフリクトが起きている両者の間をとりもち、みんなで一緒に猫の管理について考え取り組んでいく環境を作ること

を目指す。

今年度は、当団体が給餌と掃除を管理するエリアを一つ拡大し、工事に伴う生息エリアの移動にもトライした。外部からの野良猫の侵入についてはこまめに調査を続け、やむなく住み着きつつあった1頭についてはTNRを検討・実施した（最終的に譲渡）。掲示や立て看板等で積極的に周知を行い、留学生なども含めより広く周知を行うために英語のポスターも作成した。その他、学童保育の子どもたちとの触れ合いを通して猫のことを知ってもらったり、講演会の内容を収めたガイドブックにこれまでの活動の記録を加えてリニューアルしたりなど、啓発につながる活動も行った。さらに、キャンパス内の猫についての交流会を企画し、関係者みんなで話し合える場を設置した。

2. 活動内容

2. 1 管理エリアの拡大とエリア統合をトライ

昨年度より1つ目のエリア（ふようロード）で3頭の猫の管理を行ってきた。今年度は、7月中旬より2つ目のエリア（体育館裏/音楽棟）の5頭の管理を開始した。体育館裏エリアを選んだ理由は主に2つある。1つ目はふようロードと近く極端に労力が増えないことである。2つ目は体育館・音楽棟周辺の長期工事が始まり、工事現場や猫の安全性を考え、5頭の生息エリアの移動を試みるためである。さらに、生息エリアの移動先としてふようロードを設定し、2エリアの統合を試みた。



活動ハイライト：給餌管理



活動ハイライト：掃除

（事前の合意形成）

大学のエリア管轄部署に事前説明を行い、給餌管理をすることへの理解を得たうえで活動をスタートした。また、そのエリアで以前よりエサやりをしている人とやり取りを行い、当団体へ給餌管理を任せってもらうことへの理解を求めた。本来であれば、大学関係者とエサやりさん、その他関係者とで一緒に話す機会を作り、お互いの立場や猫の状況を共有し、猫の管理について一緒に考え徐々に調整していく形が望ましかったが、工事の日程がせまっていたことや、そういった場を設けることへのエネルギーや不安も大きく、この時は当団体と双方との間でそれぞれ1対1のやり取りとなった。活動開始時には不十分な合意形成プロセスとはなったが、後述する”キャンパス内の猫についての交流会”を開催することができ、今後の活動展開において十分な合意形成プロセスとなり得ると思われる。

（エサやりさんや関係学部とのコンフリクト）

事前に理解を得たうえで活動を始めたものの、いくつかの課題に直面した。例えば、エサやりさんとの折り合いが難しかったり、付近の施設関係者から猫の糞尿による被害が大きいことが分かったり、そのために最初は給餌管理という活動への不信感も大きいようであったりといったことである。

● エサやりさん

エサやりさんとの間では、主に給餌・給水の仕方について問い合わせや苦情が寄せられた。動物病院への健康状態の相談や投薬などについての問い合わせもあったり、また、だんだん言葉が感情的・攻撃的となったりした。その結果、その後もしばらくエサやりが続いてしまっていた。こういう状況が起きてしまったのは、

事前の十分な話し合いがなく、活動への理解を求めるよう一方的な要求となってしまったためである。エサやりさんとしては、これまで自分で可愛がってきた猫たちの世話を急に止めることは難しいし、“管理”と“お世話”という感覚の違いもすんなりと受け入れられるものではない。すべきと分かっていた十分な合意形成を避けてしまったことは反省点である。

● 関係学部

また、掲示や猫の移動に関して付近の学部相談をした際にもすんなりとはいかなかった。まず、昨年度は活動を始めたということもあり、当団体が給餌管理していることや団体以外のエサやりは止めてほしいとはっきりと明言した掲示は、それほど広く行ってこなかった。しかし、今年度は管理エリアが広がり、給餌をしている活動が人目につくことも増えてきた。過剰、不衛生なエサやりを誘発しないために、「当団体が管理しているからエサやりをしないで」という趣旨の掲示を積極的に行った。掲示場所の許可をとるために学生支援課を介して担当学部に相談をしてもらったところ、5頭の猫が集まっている音楽棟利用者からは、糞尿の臭いのために換気もできなくて困っている、また、ふようロード近くには畑があり、その糞尿のことも気にかかっている、との声が寄せられた。その心配があるので、給餌管理についても不信感を抱いていることが感じられた。不衛生なエサやりを制御し、糞尿被害などを改善するための活動であること、エリア移動が順調に進めば音楽棟の糞尿被害が根本的に解決されることを説明してもらい、掲示や活動に理解をいただいた。ただし、なるべく畑からは遠ざけていく形で、ふようロードの猫の移動も進めることとなった。きちんと活動趣旨を理解してくれて、担当学部につないでくれた学生支援課担当者の方にはありがたく思っている。

”山大にゃんこ大作戦”というポップな名前も相まって、団体が猫を集めている、お世話をしている、といった誤解をされることはよくある。今回のことについても、どのようにして猫が今これだけいるのか、私たちがどのような立ち位置で活動しているのか、といったことを知られていないために起こった誤解であると思われ、今回新たに一つの学部の一人にでも知ってもらえたことは大きな進歩であるし、困っていることを言ってもらったことで、畑から遠ざけるというより良い方法が見つかった。最初に誤解やすれ違いがあることは当たり前であるので、大変ではあるが、地道に知ってもらえるよう働きかけていくしかないと感じた。

(ポスター掲示)

掲示については、プロジェクトの紹介ポスター、“団体で管理しているので餌付けしないで”ポスター、また”生態調査のために不定期でカメラ撮影をしている”ポスターの3点を掲示した。体育館裏や音楽棟、畑近くの倉庫、エサの放置が散見されていた場所を中心に目につくように掲示した。”生態調査のために不定期でカメラ撮影をしている”ポスターについては、過剰なエサやりに対する抑止力をより持たせるために作成した。昨年度からトレイルカメラの利用を検討しており、今年度も必要に応じて利用しようと考えていた。まずはポスターを用いてそのことを発信することから始めた。結果として、今年度実際にカメラを稼働させることはなかったが、この掲示をすることは大きな効果があると考えられる。

活動を開始してからしばらくが経ち、一時期ふようロードでのエサの放置が散見された。それをしている人とコンタクトをとるのが難しかったため、活動終わってから翌日まで、エサの放置があったピンポイントの場所に掲示ポスターを設置した。数日それを繰り返すと、徐々にエサの放置は見られなくなった。現在も完全になくなったわけではないと思うが、積極的に掲示を利用していくことは有効だと考えられる。

他に、音楽棟向かいの教育学部棟入口にも掲示を行った。これは、ある活動日、体育館裏の猫たちがある人について行って校舎の中にまで入り込んでいくのを目撃したためである。教育学部玄関前の広間に体育館裏の猫がいることは以前からあった。しかし、校舎の中にまで猫が入り込んでしまうことが続くと、学習・研究環境として問題となる可能性がある。その人とコンタクトは取れなかったが、定期的のエサやりをしていて猫が懐いていると思われた。これを受けて、校舎入り口に掲示を行った。それ以降、校舎内まで入っていくことはほとんど見なくなったが、今後も校舎に入り込むことが続くようであれば、必要に応じて対応を検討するつもりだ。

さらに、音楽棟付近にも掲示を行った。これは、先述したエサやりさんだけでなく、エサがばらまかれている場面が散見され、中には人のお菓子などが放置されていることもあり、不衛生・不適切なエサやりが度々あった。これを受け、音楽棟工事現場入り口付近にもポスターを掲示した。



ポスター掲示：ふようロード



ポスター掲示：ふようロードでエサの放置があったポイントに一時的に



ポスター掲示：教育学部棟入口



ポスター掲示：音楽棟駐輪場



ポスター掲示：ふようロード出入口



ポスター掲示：その他置きエサがみられた南門付近

（立て看板、腕章）

積極的な活動周知の一環として、ポスターの他に立て看板や腕章を用いた。立て看板にはプロジェクトの紹介と餌付けしないように呼び掛けるポスターを貼り、活動の間に限り設置した。これまでは通りすぎる人が不思議そうにちらっとこちらを見ることも多かった。私たちが何なのか、何をしているのか自体も分からない人がいたかと思われるため、立て看板の利用は、その人たちにとっても、また活動メンバーにとっても、安心を与えるのに有効な方法であったと思われる。また、これまでは学生支援課から山口大学のビブスを借用し公認の活動であることを示していた。これは大きな効果があったと感じており、今年度はさらに腕章を装着し、より分かりやすいようにした。



ポスターを貼りつけた立て看板



腕章

（猫の誘導）

実際の活動にあたっては、給餌場所を少しずつずらしていくことで猫の生息エリアの移動を試みた。まずは体育館に沿った方向に移動する計画で進めた。猫の集まりは日によってまちまちではあり、活動開始時の定位置はなかなか変化しづらかったが、だんだんとグラウンドに向かう途中の広間でくつろいでいる姿が見られるなど、少しずつ移動は進んでいるように思われた。しかし、工事の範囲が広がるとともに立ち入り制限がかかり、猫の定位置にも変化がみられたため、教育学部棟に沿う方向に誘導コースを変更した。給餌時間帯にふようロード側へ移動することには猫もだんだんと慣れてきているようで、少しずつふようロードに近づいていった。しばらくすると、体育館裏にすぐ戻らず、畑や陸上競技場、教育学部中庭あたりを探検している様子も見られた。



体育館裏の給餌場所スタート地点



給餌場所をグラウンド方向に移動していく



さらに移動



移動



コースを変えさらに移動（誘導している様子）



ふようロードに到着



陸上競技場のブルーシートに向かい

グラウンドを散策する体育館裏の猫



食べ終わり後のしらたま

ふようロードを散策する体育館裏の猫



ふようロードの給餌場所の移動



グラウンド側に移動した給餌場所で食べる
ふようロードの猫

(糞の様子)

エリア移動の状況は、糞の様子からも分かることがある。ふようロードに3頭の猫がいた昨年度から今年度はじめにかけては、グラウンド沿いの側溝に糞がよく見付けられていた。ふようロードの猫が2頭死亡してからは、以前はかなりの割合で見つかった側溝の糞が、ほとんど見えなくなった。一方で、体育館裏の猫たちは、基本的には体育館及び音楽棟付近にいることが多かったため、排泄もその近辺でしていたようだった。特に工事で地面が掘り起こされたところは、猫にとって好条件な排泄場所であるため、工事現場内で排泄している様子が高頻度で見受けられた。できる限り除去していたが、工事現場内ということもあり限りがあつた。ただし、ふようロードでの給餌に慣れていくにつれ、食事後に少しふようロードに留まっていたり、ふようロード横の側溝でトイレをして帰っていったりする様子も見られた。その後、また側溝で糞が見られるようになったため、体育館裏の猫たちがそこで排泄していると考えられ、エリア移動が進んでいることが感じられた。時には畑で排泄してしまっている場面もあり、それについては可能な限り除去するように努めた。エリア移動のコース途中であり、排泄しやすい場所であるため、しないようにコントロールすることは難しく、エリア移動を続けるのであれば、一時的に仕方がないものとして、その都度除去する形で対応するしかないかと思われた。



掃除：体育館裏（工事前）



掃除：体育館裏（工事前）



掃除：ふようロード



掃除：体育館裏からふようロードに向かう途中



掃除：ふようロード

(団体外のエサやり)

順調にエリア移動が進んでいる時期もあったが、様々な課題があり、すんなりとはいかなかった。すでにエサやりさんとの折り合いがうまくいかなかったことを述べたが、音楽棟付近（工事現場内）での当団体以外のエサやりが続いていたため、定住位置の移動が難しかったり、また、お腹が空いておらずこちらの給餌に見向きをしなかったりといったことが目立ってきた。もちろん、距離的にも近く、時間も早めで、慣れている人からのエサやりが続けば、猫は定住場所を移動する理由がなくなる。さらに、3月には放置されたエサに見知らぬ猫が寄ってきている様子（2.2で後述する新たに侵入してきた黒白の猫）も見られ、エサの放置の影響の大きさを改めて認識することとなった。先述したように、エサやりをする人も分かっているのだろうが、長く可愛がって続けてきたエサやりを止めたりやり方を変えることはその人にとってはとても難しいことだ。その気持ちを汲んだうえで、歩み寄りを重ねていくしかない。これらのことについては、“キャンパス内の猫についての交流会”の時に話し合い、エサの放置はせず、ふようロードに誘導する方向で協力していくことでお互いに理解を得ている。また、その他にも不定期でエサがばらまかれていたり、中には人のお菓子が放置されていたりと、不衛生かつ不適切なエサやりも見られた。

このようなことがあり、定住場所がなかなか動いていかないと、誘導する距離が長くなっていく。人通りが多いこともあり、猫も隠れたり止まったりしながら進んでくるような様子だった。その時の空腹状態にもよるのだろうが、途中で止まって動かなくなってしまうこともあった。



体育館裏のエサやり



体育館裏のエサやり（別の人によるもの）



ふようロードのエサやり

（縄張り争い）

また、体育館裏の猫たちがふようロードにいくにつれて、仲がうまくいかない猫どうしが出てきた。猫は基本的には単独行動をする動物であるが、エサ場などを中心に集団を形成することもある。（特に人のエサやりであれば、時間がそろったり、よそに探しにいかなくなったりして、より集団化しやすいと言えるだろう。）猫は縄張りをもつ動物であり、猫の社会では曖昧ながらも上下関係が存在する。気に食わないもの同士がどちらも降参せず譲らない場合、けんかに発展する場合がある。

ふようロードに1頭（※）、体育館裏に5頭いて、けんかをしてしまう可能性として十分あると考えていた。大抵はそれほど気にしていないように見えた。むしろ、体育館裏の猫の中には、私たちの給餌時間以外でも、ふようロードの猫と仲良く一緒にいる姿が見られていた。しかし、体育館裏の1頭だけはふようロードの猫と反りあ合わなかったようだ。お互いに威嚇し合って攻撃態勢をとっている場面が何度かあった。それまで順調なペースでふようロードへの誘導を進めていたが、体育館組の誘導はペースダウンし、ふようロード組のグラウンド側への移動を先に進めることにした。

けんかへの対応としては、けんかに発展しそうな場合は間に入り仲介した。ただ、けんかによって上下関係に決着がつく場合もあると考えられるため、とりあえず猫たちで解決するのを待ち、怪我をするほどに発展した場合のみ仲介に入る、という方法が良かったのかもしれない。

（※）ふようロードでは昨年度から3頭の管理を行っていたが、そのうちの2頭は、10月および11月にそれぞれ死亡したと思われる。年齢も5～6歳と野良猫としては高齢であり、徐々に衰弱していつている様子が見られていた。



ふようロードの猫に喧嘩を売りに行く体育館裏の猫



ふようロードの猫（右）と仲良くしている
体育館裏の猫（左）

（見知らぬ猫の接近（サバ白））

ふようロードエリアでの活動中に起きた出来事として、9月中旬～下旬にふようロードに見知らぬ猫（耳カットはなく不妊未処置）が現れた。痩せており、団体で用意している飼料を狙っている様子がうかがえた。団体内で相談し、むやみに餌付けしてキャンパス内に住み着かせてしまうのは避けたい、という方針のもと、まずはその猫にはエサをあげないようにした。給餌中の見守りを強化し、飼料を狙ってくるようであれば、少し近づいて食べさせないようにした。すると、2週間ほどでふようロードから姿が見えなくなり、その後もキャンパス内での目撃情報はない。

このことから、たとえキャンパス内に一時的に迷い込んだとしても、餌付けがされなければ住み着く可能性は低くなると考えられる。今回私たちは、むやみに餌付けをしないという方法をとったが、見知らぬ猫への対応というのは今後も議論が続くところであると思われる。やせ細った猫を放っておけないという気持ちは多くの人が抱くものであるし、あるいはエサの放置が続けば知らず知らずキャンパス内をエサ場と認識し住み着いてしまう。特に気持ちの部分については難しいところであるが、少なくとも将来誰かがその責任を取らなくていいように、みんなで一緒に話しあって自分たちなりの方法を選択していかなければならない。

交流会などを通してこの件についてもエサやりさんと少し話をした。当団体としては、猫にTNRをするしかない申し訳なさやつらさ、大変さを分かっているからこそ、新しく猫を住み着かせることはなるべく避けたい、という思いがあり、エサやりさん側もそれは理解をしてくれているようだ。一方で、お腹が空いてそうでかわいそう、自然に住み着いてしまった猫を邪険にするのはかわいそう、といった思いは簡単に無視できるものではない。

開けた出入口が複数箇所あったり、山林が隣接していたりするため、猫が迷い込むことを完全にコントロールすることは不可能であり、またそれぞれ状況が異なる。そのため、一元的な対応策の確立というのは難しく、その都度対応を検討していくしかないと考えられる。ただし、少なくともむやみに餌付けをしないこと、エサの放置をしないことといった最低限の共通認識は必要であると思われ、今後交流会などを通して検討を継続していきたい。



ふようロードに現れたサバ白猫

(最近の様子)

3月下旬に入り工事が撤退すると、猫はもとの体育館裏の位置に戻っていった。さらに、地面へのエサの放置も再開されており、それについては改めて掲示や呼びかけが必要である。誘導がまた一からやり直しになった感じはあるが、それでも、なかにはふようロード側によく姿を見せるようになった猫もあり、まったくの骨折り損というわけではなさそうだ。工事により音楽棟ではコンクリートの部分が増え、猫の排泄場所が以前よりは限定されたことで、糞尿被害の軽減は望まれるかもしれない。それでも、排泄場所や人通りの少なさ、隠れやすさなどの点で猫が生息しやすい場所ではある。つい先日には、キャンパス内清掃の関係者から、掃除中の糞尿について相談があり、音楽棟エリアもその一例としてあるそうだ。清掃中はしゃがんで地面に顔や体が近づくため、糞尿があまりに過剰であると、臭いだけでなくその粉塵による被害があったり、外にいる動物の糞ということで病気の心配もあるとのことだった。また、エサやりさんと管轄学部との間で合意のもと冬場の猫シェルター設置が行われていたことが分かるなど、猫についての情報や管理がまとまっていない状況だ。

ふようロードの1頭については、グラウンド側への給餌場所の移動は順調に進んでいった。しかし、やはり畑側の方が身を隠しやすいため、ふようロード側に常にいるようにすることは難しいようだ。また、一度体育館裏の猫と対立した後から、そちらが気になるようで、体育館裏の猫たちような飼料を気にする様子がうかがえた。そのような中で、もともと警戒心が強いことも相まって、グラウンド側の給餌場所にたどりつかないことも増えてきた。今は、少し場所を戻し、猫の様子を見ながら給餌場所を設定している。

今年度トライしてみて分かったように、エリアの移動と統合は容易ではなく、長い時間がかかるものと思われる。今後体育館裏の猫たちの管理については、エリア移動を引き続きトライするか、逆に生息場所を留めて排泄場所を整備することで糞尿被害の軽減に取り組むかなど、どのように管理していくか検討が必要である。施設関係者、清掃関係者、エサやりさんを含め、関係者どうして話し合っていく必要がある。

また、昨年度からの継続課題として、毎日の活動を続けるにあたっての人手不足の問題がある。活動時間帯に幅を持たせたり、少人数で対応したり、というように対応をせざるを得ない状況が続いてしまうため、今後も人員確保には力を入れたいところである。

結果として、今年度での生息エリアの移動・統合は達成できなかった。しかし、管理エリアを広げ、エリア移動にもトライしてみたことで、分かったことや関わる人が大きく広がったことは確かである。



ふようロード側に姿を見せるようになった
体育館裏の猫



工事終了後、体育館裏に戻っている猫たち



工事終了後、再開されたエサの放置

2. 2新たにキャンパス内に現れた猫たち：TNR と譲渡

ふようロードに現れ2週間ほどで見なくなった猫の他に、今年度もキャンパス内への新規野良猫の侵入が何度かあった。5月ごろに黒い若猫，6月ごろに黒白の若猫～成猫，そして同じく6月に子猫を確認した。

まず子猫については，6月に経済学部で突如現れた。学生伝いで団体に情報が入り，活動終わりに経済学部を訪れ様子を確認するようにした。経済学部校舎横の室外機あたりに段ボールが置かれており，そこで生活しているようだった。段ボールの持ち主は不明であるが，周りの学部の学生が心配してエサをあげるなどしていたようだ。一度，その学生たちと会うことができ，団体の活動について知ってもらったり，「かわいそうなのは分かるが今後どうするかも考えたうえで責任ある行動をとらなければいけないと思う」ということを話しあった。しかし1か月しないうちに，子猫の姿は見えなくなり，その後の消息は不明となった。目撃情報などを踏まえると保護された可能性を考えてはいるが，失踪や死亡の可能性も考えられる。



経済学部室外機の間にあったダンボール



経済学部に現れた子猫（最初は食堂あたりで目撃）

5月～6月に現れた黒猫と黒白の若猫は、いずれも国際交流会館～経済学部棟に現れた。しばらく様子を見ていたが、いずれも定期的に目撃情報が続き、特に黒猫のほうは国際交流会館で見かける頻度が高く、ほとんど住み着いている状態と思われた。8月下旬には2頭が一緒にいるところも目撃し、早めに対応しないと子猫が生まれる可能性があった。黒猫は観察によりメスと思われたため、さらに緊急性は高いと思われ、新たに子猫が増えてしまわないことを第一優先にしたいという方針のもと、できるだけ早めの TNR を実施することを決定した。12月中旬に捕獲・避妊手術を行い、リターン予定であったが、団体メンバー関係者から引き取りの依頼があり、結果として譲渡する形となった。猫がまだ幼いこともあり比較的人慣れしており、ノミ・ダニが一見見当たらず、健康状態も良好であると思われた。これらのことを考慮し、譲渡適正ありと判断したため、イレギュラーではあるが譲渡することとなった。実際には、学生では住居の関係上一時保護などが基本的にできず、さらに外部に譲渡するとなると、人馴れや初期医療、譲渡先への事前説明や誓約書の用意等、気を付けるべき点が多く、団体のみによる譲渡活動にはハードルがあると思われる。



経済学部駐車場に現れた黒白猫



国際交流会館に現れた黒猫



国際交流会館で一緒にいた黒白猫（右）と黒猫（左）



TNR 活動の様子：捕獲器の設置



譲渡後の黒猫

黒白の猫は国際交流会館～経済学部棟での目撃頻度にはばらつきがあったが、2月～3月にかけて、ふようロード～音楽棟エリアに姿を見せた。音楽棟付近に放置されているエサに寄ってきている様子がうかがえた。

さらに、その後に得た情報では、理学部3号館あたりにも姿を見せているようで、行動範囲が広いことが分かる。国際交流会館あたりを離れるようになったのは、そこでのエサの放置がなくなってきたためとも考えられ、2.3で後述する、国際交流会館あたりでの呼びかけによる効果が表れたのかもしれない。しかし、キャンパス内にいることに馴れる十分な時間は経っており、隠れる場所が多く、エサ場が他にも多くあるため、キャンパス内を探りはじめたのではないかと思われる。



音楽棟あたりに姿を見せた黒白猫

昨年度を含め、これまでも見知らぬ猫がキャンパス内に姿を見せ、新たに住み着く例は散見されていた。昨年度も新たに住み着いた猫2頭に対し TNR を行った。(その2頭については、リターン後1か月後には姿が見えなくなっており、タイミングや姿の消し方から、誰かが引き取った可能性が高いと考えている。あるいはキャンパス外に生息場所を変えた可能性ももちろんある。) キャンパス内に新たに野良猫が迷い込む例を見ていると、国際交流会館横の出入口からの侵入が多い。理由としては、国際交流会館～経済学部棟駐車場～人文学部玄関にかけて、出入口がすぐ横にあるところで過剰なエサやりやエサの放置が多いためだと考えられる。もともと、TNR 済みの2頭が住み着いているが、他のエリアと比べて2頭という数は少なく不妊処置が済んでいるため、縄張りによる侵入抑制力が弱いことも一因かもしれない。国際交流会館は留学生の住居であり、施設関係者から猫が住居に侵入しているとの相談も受けたことから、より注意が必要である。

後述する国際交流会館付近での呼びかけの他に、外部野良猫侵入への対策として、猫除け用の忌避剤を利用した。昨年度は猫除け超音波装置を利用したが、費用的な面と効果の比較のために、今回は忌避剤を選択した。まずは、現時点で最も侵入経路として多いと予想される、国際交流会館横の出入口に散布した。ペPPERオイルとメントールが配合され、猫が臭いや刺激を嫌がって寄ってくるのを避けるというものであり、1回の散布で2～4週間ほど効果が持続するものだ。散布時にはやや刺激臭がするものの、1時間もすれば通り過ぎる分には臭いなどは気にならない程度に落ち着き、人への影響はそれほど強くないと思われる。問い合わせなどがあれば、散布エリアや頻度の調整を行っていく。今後、ふようロード出入口を始め他の散布エリアも検討していく。ちなみに、昨年度に設置をした猫除け超音波装置”番人くん”も、引き続き稼働中である。

猫除けの方法として、他にローズマリーやミントなどのハーブを植えたり、酢やハーブを用いた自作忌避剤をまいたりといった方法がある。2.1 でキャンパス内の大学関係者から話があった糞尿被害に関連して、花壇が排泄場所になってしまっていることも気にかかっているようだった。まずは、ハーブや忌避剤を利用してみることを提案してみたが、こういった問題は、本来はエサやりをしている人が考慮しなければいけない問題であるし、関係者みんなで話し合うべき問題である。今後、交流会を行っていくうえで一つの重要な観点である。



国際交流会館のエサやり



経済学部駐車場のエサやり



国際交流会館横のキャンパス出入口に忌避剤を散布

以上、今年度は外部野良猫の侵入は、把握してある限りで4頭であった。ふようロードの2頭が死亡してしまい、その他、死亡情報や失踪情報を合わせ、キャンパス内猫の頭数推移は以下のグラフのとおりである。なお、黒白猫については、目撃情報や生息エリアがいまだ不安定ではあるため、頭数には入れていない。また、キャンパス内のコロニー分布は以下の図のようになっている。

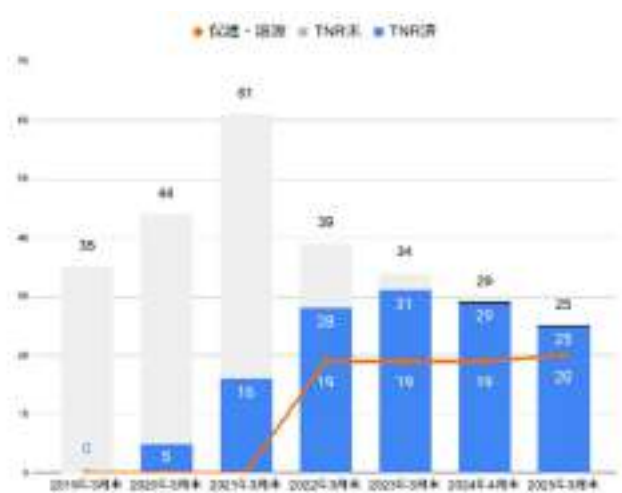


図1 キャンパス内の猫の頭数推移



図2 キャンパス内の猫の分布

2. 3より多くの人に伝える：留学生への呼びかけ

国際交流会館～経済学部棟駐車場～人文学部玄関にかけて、出入口がすぐ横にあるところで過剰なエサやりやエサの放置が多いと述べたが、その中には留学生によるエサやりも一部あるようで、昨年度から気にかかっていた点である。特に留学生会館は住居として機能しており、猫の侵入に関して実際に相談も寄せられた。また、外部の野良猫の侵入が多いところでエサの放置などが続いてしまうと、新しい野良猫の住み着きが過剰になってしまう。実際に、今年度侵入した猫のうちの2頭も、国際交流会館横の出入口から侵入したと思われ、国際交流会館裏でエサやりが行われており、そこへの住み着きが進んでしまっていた。

団体による給餌管理を始めてから、不必要・不適切なエサやりを制御するためのポスターを各所に掲示していた。しかし、日本語であるため留学生に対しては伝わりづらいところもある。当大学は留学生が多いため、彼らへの呼びかけも必要である。そこで、留学生係に相談したうえ、英語版のポスターの作成に取りかかった。また、ポスターと同様の内容のメッセージを、やさしい日本語と英語でメールを使って周知することにした。

留学生に対してこの問題を考えるときに難しいポイントとしては、動物や野良猫への考え方について、地域性や民族性が少なからず関係していることである。野良猫に対する考え方にはある程度の地域性や民族性が関係している。猫に限らず、ある動物がある地域では神聖な動物として扱われていたり、あるいは別の地域では使役動物として扱われていたり、動物に対する考え方は国や地域によっても大きく差がある。(もちろん、時代や社会の変化によってそれは異なっていく、また特に現代では、同じ社会でも個人の価値観の違いがより浮きあがりやすいところもあるだろう。)日本人どうしても、今実際に起きているように、価値観の違いによる衝突があるが、国が違えばさらに大きな違いが見えてくることもある。それでも、多くの留学生が通う本大学において、多くの人々がキャンパスを利用し、人によってはキャンパス内で生活する環境においては、留学生も交えて猫への関わりについて考えていかなければいけない。それぞれが異なる背景や価値観を持っていることは理解をしたうえで、動物を慈しむ気持ちを否定するものではなく(この点については留学生に限らずではあるが)、自分やまわりにも困ったことが起きることを説明し、エサをあげないようお願いする内容とした。

作成にあたっては、団体内の国際総合学部のメンバーを中心に英語の添削などに取り組み、おもプロ担当者や留学生係にもご協力いただきながら内容や文章を考えていった。ただでさえ一言で説明することはできない内容であるが、さらに留学生に向けてということで、何に焦点を置くべきか、またシンプルかつやさしい表現でまとめることが非常に難しかった。1か月近くかかって完成し、11月中旬にポスター掲示とメールでの呼びかけを行った。昨年度からの課題であった英語版のポスター作成が達成できたことは良かった。また今回、留学生向けのポスターとメッセージの作成を通して、国際総合科学部のメンバーが大きな力となり、団体内の学部層が広いことは大きな利点の一つであると感じた。他にも、学生伝いで各学部の施設近くにいる猫の情報が入ってくるとも多く、情報網を広く敷くことができるという点でも大きな利点であり、今後もいろんな学部の学生が参加してくれると嬉しい。

今後も必要に応じて随時メール周知を行うことが望ましいと思われる。また、留学生受け入れ時のオリエンテーション等で、猫のことについて事前に伝える機会が得られれば、より周知につながるだろう。



英語版のポスター



ポスター設置の様子

2. 4子どもたちに知ってもらう：”ヤマミィ学級”

山口大学学童保育”ヤマミィ学級”で子どもたちと触れ合う機会をいただいた。キャンパス内の猫たちの写真を用意して自由にお絵描きをしてもらったり、猫の写真を利用したパズルゲームを一緒にしたり、動物クイズを企画したりした。また、レクリエーションを通して、子どもたちにも猫（野良猫）との関わり方について考えてもらうきっかけになるような何かを伝えたいという思いがあった。動物クイズの中に猫に関するクイズを混ぜ、キャンパス内の猫のことや野良猫との関わり方について考えてもらうことにした。

準備にあたり、どこまでを、どのように伝えれば分かりやすいかという点で工夫が必要であり、留学生に向けたものとはまた違った難しさがあった。家にいる猫とは違う”野良猫”というものがあることから始まり、そういう猫を見かけたらどう思うか自由に考えてもらった。”かわいい”，”どこから来たの”，”近くで見たことある”といった声があったり，中には”誰かがエサあげてるんでしょ”という声もあがったり，色々な意見が出た。動物に親しみをもってもらうことは大切であるが，好奇心旺盛な子どもたちが，不用意に近づくことを誘発してしまうと，怪我をしてしまったり，そこから病原体が移ってしまったりすることもあり得る。そこで，「野良猫を見かけても，無理に近づかないこと，触らないこと，何もあげないこと」というメッセージを伝えた。

ヤマミィ学級を通して，まずは子どもたちが用意したレクリエーションも楽しんでくれたようで，それが何よりも良かったと思う。猫の写真を気に入ってくれて，団呼で呼んでいる名前をたくさん聞いてくれた。動物への親しみをもってもらうことと，一方で適切な関わり方を考えなくてはいけないこと，そのバランスをうまく伝えることが，今回だけでは十分でなかったかもしれない。それでも，野良猫という存在を知ってもらう機会をいただけたことはありがたかった。また，子どもたちが大きくなったときに，思い出してくれたり，考えてくれたりしたら，とても嬉しいことだと思う。

今回の企画にあたりご協力いただいた，学童保育の職員の方やおもプロ担当者の方にお礼を申し上げたい。



猫のお絵描き



猫の写真を使ったパズルゲーム



動物クイズ



野良猫についてメッセージ



好きな猫の写真をプレゼント

2. 5 Giving Campaign 2024 秋：おもプロのおかげでアカデミックスタッフ賞を受賞

昨年度に引き続き、学生による寄付イベントである Giving Campaign に参加した。活動を知っていただく機会として参加させていただき、今年度も多くの温かい応援コメントをいただいたことで、感謝の思いが大きくなり、また活動への励みとなった。さらにありがたいことに、大学教職員からの応援が多かった団体に贈られる賞である、アカデミックスタッフ賞をいただいた。おもプロの活動を通して、山大にゃんこ大作戦を知ってくださり、協力してくださったり、応援してくださる大学関係者の方々とたくさん出会うことができたので、今回このような賞をいただけたことは、おもプロで活動させていただいたからだと思う。賞をいただいたことというより、活動が続けてきたことで、多くの方が知ってくださり、関わってくださったことに気づけたことが嬉しかった。山大にゃんこ大作戦を応援してくださっている皆様に改めて感謝したい。



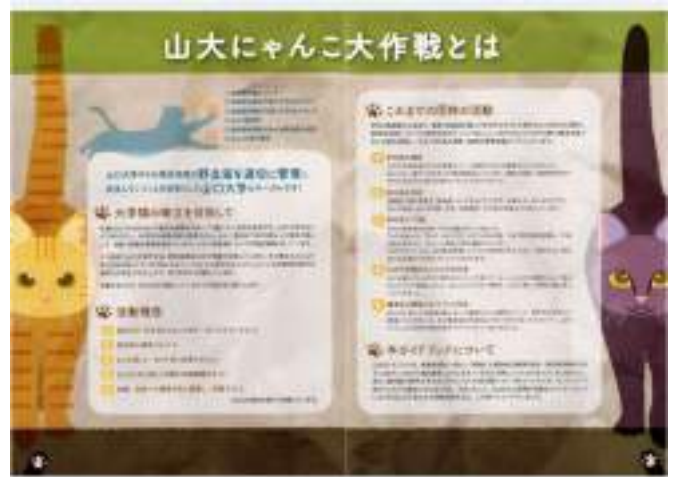
投稿写真

2. 6 地域猫活動ガイドブックをリニューアル：活動奮闘記

2019年度に山大にゃんこ大作戦地域猫活動ガイドブックを発行していた。これは、山大にゃんこ大作戦発足当時、野良猫活動についての多角的・客観的な知識を得ること、また啓発の一環として全5回の講演会を開催し、それらの内容をまとめたものである。今年度、改めて講演会を実施し、ガイドブックのリニューアルなどを考えていたが、講演をお願いしたいと考えていた方と都合が合わず、見送りとなった。そこで、私たちの活動発足から今までの活動をまとめた”活動奮闘記”を付け加えたリニューアル版を作成した。今後も、内容の追記・修正などを加えながら、継続的にリニューアルしていきたい。団体外への発信はもちろん、人の入れ替わりが続く団体内での活動共有にも活用できる。団体内で活動記録を随時つけてはいるが、こうして外部にも発信できるような形に残るものとして作成できたのは良かった。原稿修正から印刷にかけて、ぎりぎりまで対応してくださった担当者の方、印刷会社の方、本当にありがとうございました。



色味もリニューアルしたガイドブック第2版



ガイドブック第2版



活動奮闘記 1



活動奮闘記 2



活動奮闘記 3



活動奮闘記 4

2. 7 他大学学生サークルとの交流

ある大学で猫についての活動を行っている学生サークルの方々が見学に来てくれた。実際に毎日やっている活動を見学してもらいながら、お互いの活動について意見交換を行った。

その大学では、学生サークルのほか、教職員が中心となって活動している団体があるそうだ。2〜3年前には30頭ほどいたのが、ここ2年ほどで5頭にまで減ったそうだ。これは、子猫の割合が多くほとんどが学内関係者を中心に譲渡されてきたことによる。譲渡にはやはり、教職員団体やサークル顧問など、一時保護のための住宅などをもつ学生以外の協力が大きいようだ。ただし、教職員団体と学生サークルは独立した組織で、連携がうまくいかないといった課題はあるそうだ。当キャンパス内はというと、2021年度に主に子猫14頭の譲渡を行ったが、それでもなお30頭以上の成猫が生息していたため、もともとの生息数がかかなり多いことが分かる。キャンパスが山奥に立地していることから、今でも毎年数頭のペースで子猫の侵入があるそうで、譲渡を中心に対応しているとのこと。また、今キャンパス内に生息している成猫5頭については、サークルで給餌を行ったり、必要であれば最低限の投薬をしたりするなどの管理をしているそうだ。サークル内外でエサやりは行われており、私たちと同じように、他のエサやりさんとのコンタクトや連携には苦戦しているとのこと。

本キャンパスでは、投薬をしたり動物病院に連れて行ったりしているエサやりさんもいる。2.1において、エサやりさんから動物病院への健康状態の相談や投薬などについての問い合わせもあったと述べたが、当団体では現状、投薬などのケアは行っていない。キャンパス内にまだ30頭弱の猫がいるなかで、費用や人手の面での負担が大きく継続性を担保できない。

医療的ケアについてもみんなで話し合っていくべきポイントだと思う。そもそもどれくらいのケアを行うべきか・行えるかは、人それぞれ事情や価値観が異なるが、TNRが収束している現状では、個人の判断によるという側面も強いかもしれない。しかし、資金・労力的にパンクするまで手が引けなくなってしまうケースも実際にあり、特に私たちは人の入れ替わりも多くなってしまうので、足並みをそろえて進めていくことにも注意が必要である。さらに、手厚いケアが逆に猫に苦を強いることになるのではないかと論点もあるだろう。外にいる以上、体調不良や病気を繰り返すことは避けられない。例えば、すぐに手を出してまた体調不良を繰り返すことの苦痛もあるのではないかと、そのまま引き取ったり譲渡したりするあてもなく長く入院させた後でまた外に返すことが適切なのかどうか、といった意見もある。また、十分な診察なしの処方や、指示がないまま投薬・塗薬することは、症状の改善に逆効果をもたらす可能性も十分にあるだろう。助けたいという気持ちは純粋なものであるが、相手が猫である以上、どのような行為もあくまで人間としての主観であり、二面性があることは意識しておくべきだと考える。難しいところではあるが、そういったことについても話し合っていくことが望ましい。

今回、他大学での野良猫の様子を聞いて、地域によって野良猫の状況や変化の仕方、また自治体による不妊手術助成制度や活動の仕方などが異なることを改めて学んだ。特に、教職員による自主団体があるのは驚きであった。それぞれの選択や進め方にメリット・デメリットがあるだろうし、自分たちが抱える状況や課題のなかで、大事にしたいこと、優先したいことも異なることが普通である。重要なのは、そのコミュニティの中で一緒に考え取り組んでいくことだと思った。他大学や他団体との交流は勉強になるし、自分たちの状況を客観視できる機会でもある。来年度開催予定の複数大学の交流会の話もいただき、今後も機会があれば勉強会や交流会に参加していきたい。

2. 8 キャンパス内の猫についての交流会を開催

すでに前項までにも触れていたが、「キャンパス内の猫についての交流会」を開催した。昨年度から構想はあり、優先課題ではあることは分かっていたものの、開催することへの不安やエネルギーも大きく、年度末に何とか開催することができた。キャンパス内の猫に関心を持っている人たちどうして気軽に話ができるような会として企画し、エサやりさんや大学関係者等、これまでに当団体に関わってくれたことがある方々を中心に声をかけた。結果として第1回である今回は、想定よりも少人数とはなってしまったものの、開催できたこと自体が大きな進歩であると思われ、話し合いを通して得た収穫も大きかった。

本キャンパスでの野良猫が一時期60頭以上にまで増えてしまったのは、過剰なエサやりの他に、大学の環境問題にあたる特定の管理部署がなく、責任所在も誰も分からないため、知らず知らずのうちに問題が大きくなってしまったことも原因の一つであると考えられる。加えて、管轄学部やその時の担当者によって方針や対応が異なるため、一部のエサやりさんと施設関係者の間で対立が起きたり、あるいは大学への猫の相談に対して山犬にゃんこ大作戦に管理所在が向かったりなど、猫についての情報、立場、考え、活動が様々であり、3者以上がそれらを共有する場がこれまでなかったために、状況が複雑化してきた背景がある。

野良猫問題は地域の環境問題であるため、みんなで取り組んでいくことが友好的手段であり近道である。エサ

やりの問題が顕在化してきたとき、一方が他方に対して TNR の実施やエサやりの禁止・方法変更を要求するだけでは、たとえ筋が通っていても、衝突が起きてしまい状況がさらに複雑化してしまう可能性も高い。よって、お互いに気持ちを尊重し歩み寄りの姿勢で、一緒に考えていくことが必要である。例えば、エサやりについて困っている側は、「猫を大切に思う気持ちは理解できる。自分も協力するから一緒にやり方を考えていかないか。」という姿勢で、エサやりをしている側は、「不快に思う人がいることも理解している。頭数のコントロールや衛生的な配慮もしたうえでやるから、一緒に考えてくれないか。」といった感じである。それでも最初からお互いがそこまで意識して冷静に向かい合うことは困難なことも多く、バランスの役割が必要であると考えられる。山にゃんこ大作戦はその活動経緯や団体方針から、バランスとしての側面も持つと考えている。

交流会はキャンパス内の猫についての友好的かつ効果的な管理方法を見つけていくために、大きな役割をもつと考えている。実際に話をしてみると、お互いに認識の違いや共有できる情報が多くあり、また、こうありたいとか、こうなってほしいとか、素直な気持ちも聞くことができたことは、それがどういう内容であれ、とても嬉しく思った。考え方や立場の違いはあれど、お互いに歩み寄る姿勢で話し合いができ、当初の予定より少人数とはなってしまったが、十分に有意義な会であった。終わってみれば、もう少し早くすべきだった、という思いは正直あるが、この1年を通して、いろんな活動をしたり、いろんな意見を受けたことで、それによって自分自身が得た新たな考え方もあり、それらがあったからこそ、ここまで向き合って話し合うことができたと考えている。今後も定期的な開催を考えており、関係者をはじめ色々な人と話をしていきたい。

3. 総括

”野良猫ゼロ”という見る人によっては冷酷なタイトルで始まったこのプロジェクトではあるが、そのタイトルの真意について考えることが多い1年であった。”野良猫ゼロ”というプロジェクト名は、分かりやすさを重視したところが大きく、決して猫を排除しようという意味ではない。むしろ、望まれない死を迎える猫を減らしたいという思いは、団体発足以来一つの柱であり、そのために実施を決断した TNR だったし、譲渡も多く行ってきた。ただ、TNR がここまで進みこのまま外部からの野良猫を含め管理を続けていければ、野良猫は確実に少なくなっていく。その中で、今年度は活動の幅も広がり、ありがたいことに人の輪も広がっていった。同時に、様々な意見を受ける機会も多く、自分たちの言ってきたこと、やってきたこと、目指していることが正しいのかどうか不安が押し寄せてきた。

すなわち、本当に”野良猫ゼロ”の環境を目指すのか、そもそもそれは善なのか。人のエゴで増えてしまった猫を今度は人のエゴで減らしていくことに疑問はないか。そして、これまでの動物に関する歴史をみて、猫がいなくなったらまた増やすような活動が起きる未来がないと言えるか。

大昔にヤマネコが家畜化されてイエネコ（いわゆる飼い猫）となり、日本では、平安時代から江戸時代までの800年程は高価な貴重品として繋いで飼われていたが、江戸から明治までの300年程は放し飼いが続き、鼠から人の大切な物や命まで守る”益獣”として扱われていた。放し飼いと屋外での繁殖を良しとしてきた300年の間に、野良猫というものが生まれた。一方で殺鼠剤の開発がされたり、猫のいない地域に鼠害対策で大量に子猫を運び込んだ結果、新たにノネコ問題（イエネコが野生化）が生じたりなど、”益獣”だった野良猫は大正からの約100年で”厄介者”となった。その後の70年間は殺処分ばかりの対応が続き、1990年代ごろからようやく TNR 活動が広まっていき、次いで地域猫活動という概念が生まれた。動物についての問題は、いつも人の思惑や生活の変化に動物たちが振り回された結果であり、野良猫の問題も同様である。

野良猫を減らしていくことが善であるのか、野良猫という存在に対してもっと寛容な社会であっていいのではないか、という問いもある一方で、”人のエゴで増えてしまった猫”と言っているように、野良猫についての住民トラブルが問題となり TNR や地域猫活動の概念が生まれたのは、その数が増えすぎてしまったことが要因であることも事実である。それは本キャンパスも同様である。なぜなら、野良猫の数が一定に少なく、それほど困っている人がいないなら、そもそも話題にならないからだ。動物愛護への関心の高まりに付随する形で、野良猫への関心が過剰なエサやりという形で高まっていったり、あるいは独居老人によるエサやりも増えたりしたことで、野良猫の増えすぎとそれに伴うトラブルの増加が起きる地域が増えていった。さらに、そういった野良猫トラブルにおいては、感情的な議論になってしまうと、両者ともに思考や意見がさらに極端になり、かたや過剰なエサやり、かたや過剰な嫌悪という構図ができしまい、お互いの意見を聞く耳をもたなくなってしまうという難しさもあるだろう。

本キャンパスでも、猫の頭数が異常に増えてしまったことにより、人にとっても猫にとっても悪循環が続いていたという経緯がある。繰り返しになるが、適切な頭数管理ができ、衛生管理ができ、困る人がいないのであれば、それはそれで良いのだと思う。しかし、人の出入りが多い広大なキャンパス内において、適切な頭数で維持

することを前提とした管理は簡単ではないと考える。継続的な頭数や個体把握にもかなりの労力がかかり、一元的な給餌管理をするにしてもしないにしても、その活動維持は大変である。生きた動物を相手にし、状況は常に流動的であるため、例えば TNR の判断や給餌のコントロールなどに対し、一定の基準やシステムを設けることが難しく、実際に給餌管理や TNR などを行うとなれば、大きな費用を必要とする。適切なコントロールを維持することには、知識や経験、客観性や中立性が求められ、誰が/どこがそのバランスを保ち続けるのか、という問題がある。学生サークルがそれをし続けられるとは正直考えられず、また、入れ替わりのある大学部署が担当するのも不安定要素が大きい。獣医学部が中心となり、TNR なども含めた野良猫の管理を実践的学習の一環として取り組むという手もあるかもしれないが、生体を用いた実習自体への規制が強くなっている昨今、例えば、学内の野良猫を実習に利用するということが倫理的な議論が生じることは想像でき、野良猫がいる前提でのシステム構築は困難だと思われる。そうであれば、むしろ獣医学部に限定するよりも他学部を含めた多くの学生が関わるほうが利点も大きく、その点で言えば現在のようなサークル/おもプロ団体としてのほうが良いのかもしれない。

以上のことを考えると、個人的には大学キャンパス内という環境は一定数の猫がいる状況を適切に維持していくのにはことさら大変な場所に感じられ、野良猫ゼロを目指し、その後も新たな野良猫を住み着かせないよう餌付けのコントロールをしていくという方針が、現段階では最も考え得る見解である。”山大にゃんこ大作戦フェーズ2”の名の通り、TNR が一通り完了している今、本キャンパスの猫管理は次の段階に入っている。実際問題としては迷い込んだ猫への対応をどうするかという話などになってくるのだろうが、もちろん先ほど述べたことは現段階での個人的かつ団体として働きかける場合を考えたいという見解であり、正しいのか正しくないのかは正直分からない。

私たちの活動は、ある人から見れば野良猫を排除しようとするような冷たいものに見られることもあるし、またある人から見れば無責任なエサやりと見られることもある。間をとりなすバランス的な立ち位置である以上、板挟みになることも多く、団体としての存続や新たな野良猫への対応、エサやりさんとのバランスのとり方など、答えの分からない問題に頭を悩ませることも多い。ある日、近くにいる猫や私たちの活動を興味深そうに見ている学生数名がいた。普段、通り過ぎる人一人一人に声をかけることはハードルが高いが、少し勇気を出して声をかけてみた。サークルで管理しているからエサをあげないでほしいという旨も伝えたところ、ずっと受け入れてくれた。これまで活動していて色んな意見を受けるなかで、つい無意識に構えてしまう癖がついてしまっていたように思う。素直に話を受け入れてくれる人も案外多いのかもしれない、と少しはっとしたところがあった。無意識に構えて防御態勢をとってしまうのは相手にも伝わってしまうし、自分自身もつらくなってしまう。私たち自身も、一関係者として、もっと素直な気持ちで話をしたり話を聞いたり、という心持で活動していけたら良いのかもしれないと感じた。

TNRなどを介して野良猫を管理していくという概念が生まれてからまだ25年ほどである。迷いなく言える正解というものはなくて、自分も含めいろんな人の中で絶えずゆらいでいくものだし、それぞれの人のゆらぎがびったりと重なることはめずらしい。これまでの活動を振り返って、今考えれば活動の順序に矛盾が生じているところも多くあるし、その時に適切な表現だと感じていたものが全く違う言葉のように感じることも常々だ。その不安定な中で、時にお互いの意見や想いがぶつかってしまうこともあるだろうが、それは起きて当たり前であるし、それがないと見えてこない気持ちや着地点もあるだろう。関係者をはじめみんなと考えていく姿勢を大事にしていきたい。

4. 今後の展開

他のエリアの管理に手を伸ばしたいところではあるが、まずは、今の管理エリアを維持していくことを優先したい。過剰かつ不衛生なエサやりが見られるエリアもあるため、それらのエリアについては、一気に給餌管理を始めるのではなく、ポスター掲示などできる範囲で行っていく。外部からの野良猫侵入についても引き続き観察を続けていく。

新年度に向けて新入生の勧誘に力をいれるとともに、後続メンバーが無理なく活動を継続できるような体制づくり・引継ぎにも力を入れ、団体内の交流も大切にしていきたい。

そして、交流会は定期開催を予定しており、団体活動としての定着・継続と参加者層の増加を目指す。

5. 謝辞

本年度も、各学部への相談に力を貸していただいたり、ポスター掲示にもご協力してくださったり、ガイドブックの作成にぎりぎりまでご対応いただいたりと、あげるときりがありませんが、たくさんのサポートをしていただいた大学関係者の方々、関わってくださった皆様、本当にありがとうございました。私たちと一緒に、私たち以上にこの活動のことを考えてくださり、いつも快く相談にのってくださる方々の存在は、とても力になっています。まだまだ始まったばかりで、これからも何かとお世話になるかと思いますが、一緒に考えていければ嬉しく思います。